

日本語の動詞について

森 田 良 行

1. はじめに

言語表現において動詞の占める役割は大きい。文型的に見て、動詞を述語とする文は、形容詞や名詞を述語にすえる文に比べて、はるかに長大で複雑な形態をとり得る。その理由として次のような事柄が考えられる。

1) 動詞述語は、動詞の機能である格支配によって、さまざまな格助詞——ニ、ヲ、ト、ヘ、デ、カラ、マデ、ヨリ、等——による格を受け入れ、それらの組み合わせによって表現内容を豊かにしていること。

2) 助動詞「タ」を伴うことによって時制を行っていること。

3) 助動詞、形式体言、その他が添うことによって、推量表現、意志表現、伝聞表現、比況表現、その他さまざまな表現性を豊かに付加し得ること。——例、～かもしれない、～だろう、～らしい、～つもりだ、～はずだ、～ところだ、～ようだ、～なければならない、等。

4) 終助詞の助けを借りて禁止表現その他を行い得ること。

5) いわゆる複語尾「レル、ラレル／セル、サセル／タイ」等の付加によって受身、可能、尊敬、自発、使役、希望、等の表現を行い得ること。

6) 活用形自体の働きによって命令表現が成り立つこと。

7) 補助動詞を伴うことによってアスペクト、ならびにそれに類する様態表現が可能なこと。——例、～テイル、～テアル、～テイク、～テクル、～テミル、～テシマウ、～テオク、等。

8) ～ヤル、～クレル、～モラウの付加によって受給表現が成り立つこと。これは、対人関係における動作の方向性を示すという意味を持つ。

9) 待遇表現の多彩さ。～レル、～ラレル / オ～ニナル / オ～ナナル / オ～スル / オ～申し上ゲル、等の諸形式によって、より複雑な対人関係が表現され得る。

10) 他の動詞が複合することによって、意味面で多様性を添えていること。～カケル、～オエル、～コム、～ダス、等、動詞は複合の度合いが他の品詞に比べて圧倒的に高い。

以上の諸特質から見て、動詞は文法的・語彙的にきわめて重要な地位を占めていると言ってよいであろう。

2. 語彙体系から見た動詞

国立国語研究所の語彙調査によると、動詞グループ(動詞および動詞的な造語成分)の語彙的に占める比率は表1の通りであるという。(「現代雑誌 90 種の用字・用語」昭和 31 年、による。)

表 1.

グループ	名 詞	動 詞	形 容 詞	感 動 詞
%	78.4	11.4	9.4	0.7

これによると、他の諸品詞を合わせた全語彙中の 1 割強が動詞ならびにそれに準ずる語であることになる。もっとも、名詞グループはやたらと数が多いばかりで、語彙比率の高い割には文法的にさほど複雑でも重要でもないことを考慮に入れると、名詞グループの 78.4% が即重要度の高さにそのまま結びつかない。ということは、逆に、比率第 2 位の動詞グループが、重要度から言って決して 11.4% などという低い価値ではないことを意味する。教育上から見ても、限られた基本語を除けば、名詞のほとんどは上級段階での新出単語として、学習者自身が語彙数を加えてゆけばそれでよいわけであり、さして問題は起こらない。一方、動詞は、名詞がまだ既習語彙としてさほど数多く現れない早い時期に、すでにかなりの数を学習しなければならず、初級レベル、中級レベルでの学習必要語彙という面

から調査したら、名詞の比率は減少し、動詞や形容詞グループが増加するであろう。初級・中級段階という基礎を身につける時期に、基本的な動詞や形容詞はあらかた学習してしまい、上級段階以降にひきつづき獲得していく語彙はほとんどが名詞で、あとは成句・慣用句の類である。当然のことながら、初中級段階での動詞・形容詞の占める割合は高い。早稲田大学で使用している教科書「外国学生用・日本語・初級」(昭和42年初版早大語研編)によると、収録総語数2,105語中、動詞グループは437語で20%強となっている。国研調査の雑誌90種中の動詞グループが占める比率11.4%に比べて、大きな違いを見せている。初級の日本語学習者が、新たに単語を10語習得するとすれば、そのうちの2語は動詞という頻出度である。

入門期の日本語学習者にとって「AハBデス。/AハBデスカ。/AハBデハアリマセン。」の名詞文型のみでは、まともな会話一つできない。成年に達している学習者にとって表現したいことは山ほどあるが、名詞文型のみでは欲望を満たすのに不十分である。動詞文型の課に進んで、多くの動詞を習得するに及んではじめて表現したいことが言葉にのせられる。これは動詞文型がさまざまな文法要素を含んでいて、複雑な内容を盛り込み得る形式だからである。また、習得動詞文型を効率よく活用させるためには、かなりの数の動詞を与えておく必要があるであろう。習得語彙の1割程度では追いつかない。

先に触れた国研調査によれば、語種別に見た各品詞グループが占める比率は表2の通りである。

表 2. 国研、雑誌 90 種の語種調査 (%)

グループ	名 詞	動 詞	形 容 詞	感 動 詞
和 語	55	29	14	2
漢 語	93	—	7	—
外 来 語	95	—	4	若干

この表でもわかる通り、動詞はほとんど和語である。(この調査ではサ変化する漢語名詞は動詞グループに入っていない。)漢語や外来語より和語が基本語に多いのは当然である。まして平易な日本文を作るための必要語彙が和語に片寄るのも自然のなりゆきである。入門期に習得すべき初級語彙に和語が多いわけである。

表3は早大テキストの収録語彙を語種別に分類し統計したものである。これを表4に示した国研の「雑誌90種の調査」(昭和31年)、「新聞の調査」(昭和41年)の百分比と比較されたい。初級日本語教科書が漢語・外来語に薄く、和語に厚い実態がこれらの表からつかめると思う。入門期にぜひとも授けておきたい動詞・形容詞の類がほとんど和語であること、漢語名詞が抽象名詞に多いため、中級以降に回され、初級段階では限られたものしか現れないこと、この2点に原因している。

表 3. 早大初級教科書の語種調査

	数	百 分 比
和 語	1,222	58%
漢 語	730	34%
外 来 語	121	6%
混 種 語	32	1.5%
計	2,105	

表 4. 国研の語種調査 (%)

	雑 誌	新 聞
和 語	36.7	38.8
漢 語	47.5	44.3
外 来 語	9.8	12.0
混 種 語	6.0	4.8

3. 語種から見た動詞

動詞がほとんど和語であるという意見には注が必要である。漢語動詞の中で最も一般的な「××スル」形式、たとえば「実行する、報告する」の類は、サ変動詞「する」が漢語名詞に付いたものと考えられるところから、「名詞＋動詞」と分解して扱い、動詞の総数中に加算しない。国研調査も名詞・するとして、すべて名詞扱いしている。その結果、動詞がほとんど和語としてとらえられているわけである。この漢語サ変動詞は、たとえば『岩波国語辞典』では総数 6,573 語を数えるほどであるから、数量的にはかなりの比率を占めているわけである。

動詞を「和語、漢語、外来語」の観点から類別すると、次のように分類される。

2. 和語動詞

- ア. 一般動詞……………行く、見る、受ける、来る、する
- イ. 和語名詞＋サ変…汗する、値する、うわさする、齒ざしりする、くしゃみする、いたずらする、だっこする、えんこする
- ウ. その他の和語＋サ変…青々する、寒々する / はっとする、しゃんとする / がっかりする、はっきりする、びったりする / かっかする、ぐらぐらする
- エ. お～する……………お招きする、お誘いする、お願いする
- オ. ～みする → ～んずる…甘んずる、重んずる、軽んずる、疎んずる、先んずる、暗^{くら}んずる、安んずる

2. 漢語動詞

- カ. 漢語名詞＋サ変…運動する、研究する、練習する
- キ. ご～する……………ご招待する、ご報告する、ご連絡する
- ク. 字音語＋サ変…賀する、解する、害する、議する、辞する / 信ずる、案ずる、演ずる、転ずる、命ずる
- ケ. ～とする……………寂^{さび}とする、杳^{よう}とする、れっきとする(歴と～)
- コ. 五段化 ～む…力む、目論む

～る…愚痴る, 皮肉る, 駄弁る, 野次る, 料る, 与太る

サ. 上一段化～る…退治る, 下卑る, 捏^{でっ}ちる

シ. 下一段化～る…湿氣る, 洒落る

3. 外来語動詞

ス. 外来語名詞+サ変…パスする, ヒットする, アルバイトする

セ. 五段化 ～る…ダブる (double), アジる (agitation), サボる (sabotage)

4. 語構成から見た動詞

動詞を語構成から眺めた場合, 大きく単一構成のものと, 複合して成ったものとに二分することができる。単一構成のものを「単純動詞」と呼んでおく。単純動詞は現代語意識において異種の単位の複合意識を持たないものである。語源的に複合の有無を問題としない。たとえば「願う」はもと「願ふ」で「祈ぐ+ふ」(「ふ」は継続の古代助動詞), 同様「習う」は「習ふ」で「馴る+ふ」と語源的には分析できるが, 現代語においてはもはや複合意識はないであろう。複合動詞を便宜的に (1) 動詞に他の動詞が複合したもの, (2) 動詞以外のものに複合して五段・一段の動詞となったもの, (3) 「する」が付いてサ変動詞化したもの, の3種に分けておく。

1. 単純動詞………会う, あえぐ, あえる, 仰ぐ, 煽^{あお}ぐ

2. 複合動詞(1) [動詞+動詞 / 動詞+動詞的接尾辞]…あきれる返る, あきれ果てる, 明け放す, 明けはなれる, 当て込む, 洗いたてる, あわてふためく

3. 複合動詞(2) [接頭辞+動詞 / 名詞・形容詞語幹・形容動詞語幹+動詞ないし動詞的接尾辞]…相手取る, 相成る, 垢^{あか}じみる, 垢^{あか}抜ける, 肯^{あや}ざる, 赤^{あか}茶ける, 赤^{あか}らむ, 甘^{あま}ったれる, 赤^{あか}み走る, 秋^{あき}めく, 悪^{あく}たれる, 汗^{あせ}ばむ

4. 複合動詞(3) [名詞+する / 字音語+する]…愛する, 相対する, 汗^{あせ}する, 甘^{あま}んずる, 安心する, 案^{あせ}ずる

以上のような分類方式で日本語動詞を整理していった場合、それぞれに所属する語の数はどの程度の多さなのであろうか。今かりに、おおよその目安を知る意味で、『例解国語辞典』（時枝誠記編，中教出版，昭和31年）収載のすべての動詞を，上述の分類方式に従って分類計量してみた。（『例解国語辞典』を使用したのは，見出し語として比較的古語が少ない点による。）結果は表5の通りであった。

表 5. 例解国語辞典の動詞比率

	見出し語数	比率(%)
単純動詞	2,083	45.07
複合動詞(1)	1,817	39.29
" (2) (3)	573	12.4
空見出し	149	3.22
計	4,622	99.98

ここで「空見出し」とあるのは，→印の「見よ項」をさす。たとえば「甘んじる」を引くと「→甘んずる」とあり，同様「案じる」は「→案ずる」「遊ばせる→遊ばす」「会わせる→会わす」のように，語義解説を→印の項に譲って見出しのみを立てている。これらも動詞項目として計量の対象とした。

さて、『例解国語辞典』（昭和31）の見出し語総数は，宮島達夫氏の調査によれば，40,393語だそうである。とすると，そのうち4,622語が動詞であるということは，動詞比率11.44%となる。先の国研調査『現代雑誌90種の用字・用語』（昭和31）における動詞グループ11.4%と偶然の一致を見せている。この4,622語中，単純動詞は45.07% 複合動詞(1)(2)(3)合わせて51.69%を占める。実に複合動詞が全動詞の半数以上を占めているわけである。『例解国語辞典』の複合動詞(1)は僅か1,817語しか採り上げていないが，筆者採集の複合動詞(1)は2,641語を数える。（『例解国語辞典』『岩波国語辞典』『分類語彙表』を総合して抽出した数値。）日本語の特色とし

て、語を複合させることによりいくらかでも新語を生み出せるところから、実際に通用する複合語はさらに増加するものと思われる。一方、単純動詞は、基本的なものはほとんどこれら中小辞典に収まってしまっているから、他をあさってもさほど数はふえないものと予想される。両者の割合はますます開くことになる。

一方、日本語教科書の実情はどうか。早大の初級教科書に収録されている動詞の内訳は表6の通りである。

表 6. 早大初級教科書の語種内訳

				語 数
単	純	動	詞	313
複	合	動	詞 (1)	3
		"	(2)	2
		"	(3)	107
補	助	動	詞	8
動	詞	的	造 語 成 分	4
計				437

〔語例〕

複合動詞(1)……………思い出す、とけこむ、申し上げる

複合動詞(2)……………まにあう、役立つ

動詞的造語成分 ……～おわる、～だす、～つづける、～はじめる

このうち複合動詞(3)はサ変動詞であるから名詞扱いとして除外すれば、複合動詞の総数は5語にとどまる。単純動詞313語に対して僅か5語にすぎない。0.015%である。日本語学習の入門期においては、単純動詞を習得するのが先決で、複合動詞はにのつぎということなのである。その点、中級段階での複合動詞の体系的な学習が望まれる。

5. 活用形式から見た動詞

いわゆる学校文法で特に重視されるのがこの活用形式である。動詞語尾

五 段											五 サ 変	サ 変	サ 上 変	カ 変	
B ン ダ	M ン ダ	N ン ダ	G イ ダ	K イ タ	K ッ タ		R ッ タ	W ッ タ	T ッ タ	S シ タ	シ タ	ジ タ	キ タ		
遊 ぶ	住 む	死 ぬ	急 ぐ	歩 く	行 く	売 る	あ る	く だ さ る	洗 う	待 つ	出 す	愛 す る	す る	信 ず じ る	来 る
												(せ)	(せ)	じ	こ
ば	ま	な	が	か	か	ら		ら	わ	た	さ	さ	せ		
													し	じ	こ
ん	ん	ん	い												
				い	っ	っ	っ	っ	っ	っ					
び	み	に	ぎ	き	き	り	り	い (り)	い	ち	し	し	し	じ	き
ぶ	む	ぬ	ぐ	く	く	る	る	る	う	っ	す	す る	す る	ず じ る	く る
べ	め	ね	げ	け	け	れ	れ	れ	え	て	せ	す れ せ	す れ (せし よ)	ず じ れ	く れ
ぼ	も	の	ご	こ	こ	ろ	ろ	ろ	お	と	そ	そ			
													し	じ	こ
中	中	少	中	多	少	多	少	少	多	中	多	多	少	多	少

の形態的変化の相を動詞分類の第一基準として、五十音図に当てはめて、五段、上一、下一、カ変、サ変、等に分類する。日本語教育では、このような語ごとの縦の変化(五十音図の各行の中での変化)よりは、語同士の横

下 一				上 二		活用の種類	接続語の例	活用形
E タ				I タ		音便の形式		
あり得る	(読める 可能)	教える	出る	起きる	見る	動 詞		
		え	で	き	み	ラ レ ル, サ セ ル	未然	然
						レ ル, セ ル		
え	め	え	で	き	み	ヌ (ン)		
						ナ イ マ イ		
						ダ, ダ リ, デ	連用	止
						タ, タ リ, テ		
え	め	え	で	き	み	マ ス		
						ハ, モ, タイ, ソウダ, 、		
						マ イ	連体	仮定
うえ るる	め るる	え るる	で るる	き るる	み るる	ト, カラ, ネ, ソウダ, 。		
うえ れれ	め れれ	え れれ	で れれ	き れれ	み れれ	パ	命令	未然
		えろ	でろ	きろ	みろ	！(命令, 願望)		
						ウ	所 属 語 数	
え		え	で	き	み	(推量, 意志) ヨ ウ		
少	多	多	少	中	少			

の関係における類別が重視される。たとえば、「テ」が後接する～テ form は、「行ク→行ッテ / 書ク→書イテ / 住ム→住ンデ / 出ス→出シテ」となるというように、後接語や表現形式における語尾の形態的違いを、各語

ごとに同類異類のグループとしてとらえることである。このような見地に立つと、ある form をとる場合、同類のグループに所属する動詞群にどのような語があるのか、グループとしては所属語数が多いほうか少ないほうか等が問題となる。「書イテ」グループなら「歩イテ、置イテ、聞イテ、解イテ、泣イテ、掃イテ、巻イテ…」と多いほうだが、「行ッテ」グループには同類がちょっと見当たらない。このように form における形態的相違を動詞的分類の第二基準として、動詞グループをさらに細分する。ここに掲げた活用表の2段めがそれで、ローマ字部分は活用を行を表し(B はバ行というように)、片かなは音便の有無および形式を表す。最下段はそのグループの所属語の多寡を示したものである。

ところで、動詞はどの語も必ず各活用形を有しているとはかぎらない。ある活用形のみ専ら使用される(と言うよりは、ある種の表現形態しか現れない)不完全動詞も存在する。現代語の用法でそのような例を次に掲げておく。

1) 受動態だけのもの〈未然形専一〉

例 (仲のよさに)あてられる、(悪夢に)うなされる、(身に)つまされる、(情に)ほだされる

2) 否定法だけのもの〈未然形専一〉

例 思いがけない、ほかならない、やりきれない

3) 中止法、～テ form だけのもの〈連用形専一〉

例 …につぎ、…について / …を以って

4) ～テ form、連体法だけのもの〈連用・連体形専一〉

例 …において、…における / …に関して、…に関する /
…に対し、…に対して、…に対する / …によって、
…による

6. 自動詞と他動詞

動詞を自動詞・他動詞で区別することは、特に～テイル / ～テアル表現

において重要である。～ヲ格を取るという点は、自動詞も取り得るものがあるので、特に他動詞の特性として区別の目安とするわけにはいかない。

自動詞・他動詞は、日本語の場合、対応してそれぞれの語を有するものすなわちペアをなす自他動詞群は案外と少なく、多くは自他のどちらか一方のみで、他方を欠く。その補いの機能として、使役セル / サセルを伴って自動詞を他動化し、受身のレル / ラレルを伴って他動詞を自動化する働きが見られる。(くわしくは本講座4分冊「動作・状態の言い方」、9分冊「受身・使役の言い方」ですでに触れたので、省略する。)

また、「開く、吹く、持つ、増す、働く、する」のように自他同形の語——一つの形態が自動詞にも他動詞にも働くもの——も多い。これは意味的にも対応するもの

力が増す——力を増す / 幕が開く——幕を開く

と、対応しないもの

父が働く(勤労)——盗みを働く(なす) / ボールがはずむ(弾性)——チップをはずむ(多く出ス) / 体が持つ(長持ち)——荷物を持つ(所持, 手ニ取り持ツ)

その他「潮が引く / 波が寄せる」のように、他動詞が自動詞を代行する例も見られる。なお、意味の対応・非対応は別として、和語動詞で自他同形の語は、筆者の調査では125語を数えた。

漢語サ変動詞も自他同形が多い。本来、漢語は借用語であり、また造語性に富むところから新造語も多い。そこで移入時もしくは造語時と、漢語として定着してからとでは、用法の拡大ないしは変遷が見られる。「開通する」は歴史的には他動詞であったものがその後自動詞に、「汚染する」は自動詞であったのに最近では他動詞としての用法も見られるようになった。今日、自他両用法の見られる漢語動詞はきわめて多い。筆者の調査では自他同形漢語動詞として274語を数えた。これは全採集漢語動詞の4.17%に相当する。

例 一変する, 移動する, 解散する, 回復する, 完成する, 継続す

	自 他	自 他	自動詞	他動詞	所 属 語 例
五段——五段	oる——u	R ッタ—Mンダ	積もる	積む	
	aる——u	R ッタ { S シタ G イダ M ンダ	刺さる 塞がる つかまる	刺す 塞ぐ つかむ	なくなる つながる 絡まる
	u——aす	K イタ { B ンダ } S シタ M ンダ R ッタ	動く 飛ぶ 済む 照る	動かす 飛ばす 済ます 照らす	浮, 驚, 輝, 乾, 靡, 響, 沸 澄む 滑る, 散る, 鳴る, 減る
	る——す	R ッタ—S シタ	回る 写る 帰る 残る	回す 写す 帰す 残す	余る, 渡る 移る 興る, 通る, 直る
五段——下一	る——せる	R ッタ——E タ	乗る	乗せる	かぶる, 載る
	u——える	W ッタ { K イタ } E タ T ッタ B ンダ M ンダ	従う 続く 立つ 並ぶ 沈む	従える 続ける 立てる 並べる 沈める	添う おく, 傾く, 退く, 付, 届 育つ, 建つ 浮かぶ 進む, 休む
	aる——える	R ッタ——E タ	曲がる まざる 当たる 重なる 始まる 伝わる	曲げる 混ぜる 当てる 重ねる 始める 伝える	挙, 下がる, 助, 掛, 儲, 合わさる し見つかる しまる, 決, 止, 集, 改, 固 代わる, 加わる, 終わる, 据わる
下一——五段	eる——u	E タ { R ッタ G イダ K イタ	売れる 脱げる 焼ける	売る 脱ぐ 焼く	折れる, 切, 取, 割 剝げる 欠ける, 砕, 裂, 解, 抜, 書
	oえる——u		聞こえる	聞く	
	iえる——eす		消える	消す	
			出る 逃げる	出す 逃がす	溶ける, 負ける, 化ける

	える——aす	Eタ——Sシタ	さめる 冷える 枯れる	さます 冷やす 枯らす	絶える, ふえる 遅れる, 慣, 晴, 垂, 漏, 揺
	れる——す		流れる	流す	現, 汚, 隠, 壊, 倒, 乱, 離
下 — 下 — 一	える——る	Eタ——Iタ	見える	見る	煮える
上 — 一 — 五	いる——aす	Iタ——Sシタ	のびる	のばす	
	いる——oす		落ちる	落とす	起きる, 降りる, 過, 減

る, 結集する, 結合する, 等。

ところで, 自他の対応によって組をなす動詞群において, 両語の形態的な対応関係からこれらを分類すると, およそ上のように分けられる。

2列め「oる / aる / aす / u / ...」等は活用語尾の形を示したものである。ローマ字の小文字表示は, そのグループに所属する語の活用語尾の共通の母音部分を示す。それぞれの語の活用の行が異なるため, 平がな表示を避けた。すべて同じ行で活用する場合は「る / す / せる / れる / える / ...」のように平がな表示をとった。

3列めは, 先の活用表と同様, 音便の型による分類である。ローマ字の大文字表示は活用の行を示す。「R ッタ」はラ行活用で促音便(つまる音便)となることを表している。

この表から一見してわかるように, 自動詞・他動詞の関係には形式上の原則がない。同じ「u——e」型でも「続く——続ける」は「自——他」の関係にあり, 「焼く——焼ける」は「他——自」の関係にある。自他の形が逆である。「u——e」型と「e——u」型) 語尾形式から自他の判別をすることはむずかしい。次に問題点を二三挙げておく。

1) 自——他の対応語を有する場合, 終止形が「～す」型の動詞は他動詞である。もっとも, 対応語を持たない「差す, 暮らす」の類はこの限りではない。「増す」は自他同形ゆえ例外である。

2) 「aる——e」型(例, 曲がる——曲げる)は「自——他」の対応を

なすが、同じ型で「他——他」の対応語もあるので注意する必要がある。
(例、教わる——教える / 預かる——預ける / 言いつかる——言いつける)

3) 「e——u」型(例、焼ける——焼く)は「自——他」の対応をなすが、この自動詞「e」は全く同形で可能動詞ともなる。本来「焼ける、脱げる、売れる、抜ける、折れる、切れる…」等は「…スルコトガデキル」の可能動詞ともなり得る形式である。また「…シタ状態ニナル」の意を表す中相動詞ともなる。

○厚紙ならこのハサミでも切れる。〈切ルコトが可能〉

○このハサミはよく切れる。〈鋭利〉

○縁が切れる。 / ロープが切れる。 / 靴下が切れる。〈切レタ状態ニナル〉

可能動詞は意志的な動詞にかぎられる。「動く→動ける / 帰る→帰れる / 残る→残れる」等がそれで、この場合、可能動詞「残れる」に対応する「残る」は意志動詞で、「家に残る。 / 教室に残る。」のように意志的な人間行為を表す場合である。(この「残る」は「残留スル」の意。)
「ご飯が残る。 / 金が残る。」等の無意志動詞では可能動詞は造れない。(この「残る」は「余ル」の意。)

動詞には、意志動詞・無意志動詞が同形のものと語を異にするものとある。「残る」などは同形の例であるが、この場合、その動作や状態の主体が意志的なもの(有生、有情)か、無意志的なもの(無生、非情)かによって動詞の表す意味が分れるわけである。同じ「はいる」でも、

A. 映画館にははいるないで喫茶店にははいる。

B. 靴にははいるない。 / 詰めればまだはいる。

はいる主体の有生・無生(有情・非情)によって同一語が意志動詞と無意志動詞とに分かれる。その結果、Aは動作性が強調され、Bは状態性が強調される。意志動詞のAは可能の言い方として可能動詞を用い、

○成人に達したのもう映画館にははいるる。

○未成年者はこの映画館にははいるない。

となるが、無意志動詞の B は自動詞をそのまま用いて

○大きな鞆なのでもっとはいる。

○もうこれ以上ははいらない。

とする。これを可能動詞で「もっとはいれる / これ以上ははいれない」と言い換えることはできない。

動詞を意志動詞と無意志動詞とに分けて考えると何かとつごうがよい。「～テシマウ」の解釈など、この区別が有効な例である。(本講座、第7分冊「動作の起こり方を表す言い方」参照のこと。)

ところで、同じ「落とす」でも

B. 財布を落とした。(無意志動詞)

A. 受験生を半分落とした。(意志動詞)

と二つに分かれる。この場合は同じ他動詞が両用に働いているが、ふつうは他動詞が意志動詞、自動詞が無意志動詞に働く例が多い。

A. クジで対戦相手を決める。

B. クジで対戦相手が決まる。

他動詞「決める」は意志動詞で、決定への過程を表す継続動作動詞である。自動詞「決まる」は無意志動詞で、最終結果を表す瞬間動作動詞である。意志的・無意志的の差が表現意図の違いを示し、結果としてその叙述内容に対する話し手の態度・心理をも表すようになる。

A. (卵を)とても気をつけて運んだのだが、一つこわしてしまった。

B. (卵を)とても気をつけて運んだのだが、一つこわれてしまった。

「こわしてしまった」は意志的な他動詞を用いたことにより、自己の過失からという責任を感じた言い方である。「こわれてしまった」は無意志的な自動詞を用いたことにより「卵がこわれていた」という結果を認める態度が強調され、致し方ないのだという気持ちを前面に押し出す。同一事実を自他のどちらの動詞で表現するかが発想と深いかわりあいを持つ好例である。

7. 文型から見た動詞

動詞は種々の格を取って文型を形づくっていくが、その取り方には制限がある。動詞だからいつも格を取るとは一概に言えない。本来、文脈から切り離された動詞は、はなはだ概念的な意味しか持たない。それにさまざまな場面的条件を加えて意味を限定し具体性を賦与するのが格の働きである。しかし、動詞の表す意味内容によって、加え得る条件にはおのずと制限がある。概して状態性の濃い動詞は格を取りにくく、動作性の強い動詞は逆に数多くの格を取り得る。動作や作用は

何ガ(ダレガ) / 何ニ(ダレニ) / 何ヲ / ドノヨウニ / ドコデ / ドウヤツテ / ...

と、さまざまな場面・状況を設定し得るからである。このような、動詞の文脈的意味規定をする「条件」は他にもいろいろ考えられるが、特にその動詞が要求する文型を規定する要素として、次の6条件を挙げたい。

「主体 / 相手 / 対象 / 結果・内容 / 場所・方向 / 材料・手段」

これらの条件が動詞に加わって動詞文型を形成するとき、その条件に見合った格助詞がそれぞれ使用される。今かりに A~F の記号をもって示すと次のようになる。

- A. 主体……………～ガ、～ハ
- B. 相手……………～ト、～ニ、～カラ
- C. 対象……………～ヲ
- D. 結果・内容……～ト、～ニ
- E. 場所・方向……～ニ、～デ、～ヲ、～ヘ、～カラ、～マデ
- F. 材料・手段……～デ

(以下の表の「V」は動詞を表す。)

主体 (A) 文型

A ガ自 V ……………直る、泳げる、がたがたする

相手 (B) 文型

B ト自 V ……違う, 異なる, 戦う, 連れ立つ

B 上自 V ……似る, 代わる, 会う, ぶつかる

B ニ自 V ……従う, 関する, なつく, 優る, 勝つ

B 下自 V ……?

B カラ自 V ……届く, (電話が)掛かる

対象 (C) 文型

A ハ C ガ自 V ……できる, わかる, 痛む

C ヲ他 V ……喜ぶ, 願う, 愛する, あきらめる, まねる

相手 (B) 対象 (C) 文型

B ト C ヲ他 V ……争う, 話し合う

B 上 C ヲ他 V ……話す, 相談する, 約束する

B ニ C ヲ他 V ……やる, あげる, 見せる, 貸す, 渡す, 届ける

B 下 C ヲ他 V ……もらう, 借りる, 教わる, 言いつかる, ことづかる

B カラ C ヲ他 V ……買う, 盗む, 預かる, 授かる, 受け取る

結果 (D) 文型

D ト自 V ……?

D 上自 V ……(薬に)なる, する, 変わる

D ニ自 V ……値する, (先輩に)当たる

対象 (C) 結果 (D) 文型

C ヲ D ト他 V ……思う, 考える, 誤る

C ヲ D 上他 V ……見立てる, (抛り所と)する

C ヲ D ニ他 V ……変える, 選ぶ, 推す, なぞらえる

場所 (E) 文型

- Eニ自 V ……いる, 見える, 住む, 聳える
E_テ自 V ……ある, 泊まる, 遊ぶ, 集まる
Eデ自 V ……働く, 死ぬ, さわぐ
E_ヲ自 V ……泳ぐ
Eヲ自 V ……経る, 通る, 越える
EヲEへ自 V ……進む, 歩く, 戻る, 上る
E_{ヨリ}自 V ……発つ, 降りる, 離れる
Eカラ自 V ……聞こえる
E_ニ自 V ……現れる
EカラE_ニ自 V ……行く, 向かう, 昇る, はいる, 落ちる, 逃げる
E_ニ自 V ……消える, 沈む, 寄る, 着く, 退く, 隠れる

場所 (E) 対象 (C) 文型

- EニCヲ他 V ……置く, 建てる, 植える, 捨てる, 干す
EデCヲ他 V ……待つ, 捨う, 行う
E_ニCヲ他 V ……向ける, 回す, 押す, 引く
EカラE_ニCヲ他 V ……出す, 入れる, 移す, 運ぶ

材料・手段文型

- BニCヲ他 V → BヲCデ他 V ……巻く, 覆う, 塗る, 貼る, 飾る, 刺す
BニCヲ他 V → CヲBデ他 V ……包む, 隠す, くるむ

すべての動詞は、その表す文脈的意味によって、以上の諸形式のいずれかの文型を取る。もちろん、ここに挙げた格以外に、時間や、共同動作者、人数、原因理由、比較など種々の条件が格となって加わり、文を複雑にしていくが、動詞の基本的意味を規定する要素とはなっていない。ま

た、同じ動詞でも、文脈的意味の違いによって、その取る文型を異にすることがある。

○新しい油田が見つかる。〈発見〉 E デ自 V.

○先生に見つかる。〈見ツケラレル〉 B ニ自 V.

動詞の表す基本的意味は動詞の基本文型と深い関連を持っている。次の表は、意味と文型とのかかわり合いから動詞を分類したものである。(ダッシュの部分は格助詞が入ることを表す。)

ア. 性質・属性 …若すぎる, 尖る	}	A—自 V.
イ. 能力・可能 …できる, わかる, 泳げる		
ウ. 状態変化 ……直る, 整う, 固まる, 腐る, ふくらむ		
エ. 比較・類似・関係…対する, 依る, 似る, 違う, かわる	}	A—B—自 V.
オ. 優劣 ……優る, 劣る		
カ. 価値・立場 …値する, 相当する, (先輩に) 当たる	}	A—D—自 V.
キ. 変化 ……変わる, (薬に) なる		
ク. 状態 ……聳える	}	A—E—自 V.
ケ. 存在・所有 …ある, いる		
コ. 自発 ……見える, 聞こえる		
サ. 生起・出現・消滅 …現れる, 生ずる, 消える, 死ぬ		
シ. 自然現象・無意志行為 …降る, 浮く, 流れる, 落ちる, 倒れる, (戸が) しまる		
ス. 感情・精神作用 …喜ぶ, 願う, 慕う, 嫌う, 好む		
セ. 意志的行為		A—C—他 V

自動動作

対他者行為……勝つ, 負ける } A—B—E—自 V.

単独行為……歩く, 走る } A—E—自 V.

他動動作

対他者行為……話す, 見せる, 相談する } A—B—C—E—他 V.

単独行為

単一対象……食べる, 見る, 書く } A—C—E—他V.

対象移行……思う, 見なす, 変える, なぞらえる } A—C—D—他V.

二者関係……巻く, 覆う, 包む, 刺す } A—C—F—他V.